

大分県地方史研究会創立五〇周年によせて

佐藤満洋

一四

大分県地方史研究会への入会

昭和二九年六月二十日に大分県地方史研究会（以下「県地方史」と略記）が発会したことを知ったのは、同年の八月ごろでした。当時、私は郷里の直入町に居ましたが、「農作業は碌にせず、昔の事ばかり調べ回っている物好きな青年」と多くの人々から見られていました。当時町内には、同様な、いわゆる「物好きな」大先輩（郷土史家）に田北暢舟さん、御沓重徳さん、大久保孝さん、渡辺法順さん、松尾富太郎さん等がおられ、誘われて史跡や文化財調査等のお供をしていました。そしてこれらの人々と相談して「直入古談会」なるものを結成しましたが、この席で田北暢舟さんから県地方史という研究会が発足し、大久保さんとお二人が入会した旨を聞かされました。そして「来年の研究総会には全員で行こう」と誘われ、翌三〇年の県地方史の研究総会から入会しました。

当時、県地方史の発起人の一人であり、常任委員をされていた立川輝信先生の肝入りでNHK大分放送局の「郷土資料調査」番組がスタートしており、県地方史の常任委員の半田康夫・賀川光夫両先生とともに、郷土資料調査委員として県内市町村を回り、各地の県地方史会員や郷土史愛好者と交流をしながら実地調査をして、毎月その成果を放送、県民の注目をあびていました。

このNHK郷土資料調査が昭和三一年に直入町で行われ、県地方史会員の御沓重徳さんの経営していた旅館愛泉館を拠点に、三日間の調査会が催されました。この時の調査には上記三先生の外に、県地方史常任委員の久多羅木儀一郎・会員の松岡実・加藤数功・歌人の田吹繁子四先生と大分大学の女子学生一人が加わり、案内役の上記の地元六人とNHKのアナウンサー

の、総勢一六人が直入町内の代表的な史跡や史(資)料調査を行い、久住町にまで足を延ばしました。この郷土資料調査で私どもは県地方史の先生方と交流ができ、さらに資料調査の進め方を学ぶことができました。

当時の私は直入町公民館に勤務していましたし、大学の卒論に「豊後国直入郡地方の弥生式土器の編年」なるものを書いた関係上、考古学に興味をもっていました。このため、日出町の佐藤暁さんに誘われて勤務の合間に旧石器遺跡の調査にも参加していましたし、久住・直入地方の民俗調査や、キリシタン墓石の調査等もしていました。そして『大分県地方史』や『日本民俗学』『キリシタン研究』等に若干の報告を書いたりしていました。

渡辺澄夫先生との出会いと『大分県地方史』の編集参加

昭和三十九年六月から大分実業高校(現楊志館高校)に勤務することになり、さらに同年九月から翌年三月まで県立大分工業高校定時講師を兼務しました。このようなことから翌四〇年三月に大分実業高校を退職し、四月から大分工業高校定時制に勤務することになりました。そして歴史の授業で旧石器の実物を教材として高校生に触れさせようと、大分大学の富来隆先生にお願いして、丹生出土の旧石器数点を拝借しました。四月下旬のある日、この旧石器をお返しに富来先生の研究室をお訪ねしましたが、先生は休講だったので用務員さんに旧石器を預けて、勧められるままに用務員室でお茶を飲んでみるとくに渡辺澄夫先生が研究室の鍵を取りに来られました。そしてしばらく雑談をした後、「佐藤君、僕の研究室に来てみなさい。珍しいものがあるよ。」と声を掛けてくださいました。そこで先生の研究室をお訪ねしました。珍しいものとは実は古文書でした。古文書を示されて「これを学生と読んでいるんだが、君は昼間は空いているんだろ。毎日ここに来て古文書を読みなさい。石器はおもしろいだろうが、古文書には歴史が書かれているんだ。古文書にはロマンがあるよ」と、半ば強制的に勧められて「お願いします」という次第となりました。

当時の大分大学教育学部は駄原にありましたが、私の勤務校の大分工業高校は春日浦にあり、両者は比較的近い位置にありました。そして私は大学に近い南春日に住んでいましたので、午前中は渡辺先生の研究室に日参することになりました。昼食

は家に帰り、午後二時ごろから工業高校に出勤という生活が始まりました。「どうせ大学に通うのなら」と、教務の先生に勧められて聴講生となって、渡辺先生の講義があるときは学生に交じって受講したり、古文書演習に参加しました。先生の莊園史や中世史の講義を受けているうちに中世に大いに興味を覚えましたが、「大分には近世をやる人が少ないので、近世をやりたい」と勧められその積もりになり、休日には先生が行かれる各地の古文書調査のお供もしました。

また、講義のないときは近世文書の筆写をしたり、会誌『大分県地方史』の編集や校正、会誌の発送等のお手伝いもすることになりました。県地方史は県から補助金を受けていた関係上、会誌『大分県地方史』や『豊後国村村細帳』等の史料叢書（後述）を刊行する度に県教育庁文化課に実績報告のために三冊ずつ提出することになっていましたが、その仕事はいつの間にか私の受け持ちのようになっていました。そしてそれを受付けてくれたのが橋本操六先生でしたし、後には後藤正二先生に出しました。お二人は後年、県地方史の参事として尽力してくれました。話は前後しますが、私が県地方史のお手伝いをするようになった当時、委員会での若手は私一人でした。そこに大分工業高専に野口喜久雄先生が着任され、委員会に参加下さって心強くなったのを覚えています。

因に昭和四三年当時の県地方史の役員をあげて見ますと、会長岩崎貢、委員長渡辺澄夫、委員立川輝信、高山虔三、兼子俊一、中野幡能、富来隆、賀川光夫、染矢多喜男、勝目忍、野口喜久雄の諸先生、参事は中尾勇（会計）、新崎長功・安倍巖（庶務）の諸先生と、私が編集担当として参画していました。

昭和四〇年代後半になって上記の橋本操六・後藤正二両先生が参事として参画、昭和五十年代になって大分大学に豊田寛三・新川登龜男・西別府元日三先生が相次いで着任され、参事として参画を得たし、多少前後しますが吉田豊治・声刈政治・秦政博・後藤重巳・小玉洋美等々の諸先生の参画で一氣に役員が若返えり、役員会に活気がでたことが思い出されます。

史料叢書等刊行

話は溯りますが、昭和三五年一月から一年半にわたって県地方史の役員が中心となって、毎日新聞大分版に「大分県の歴

史』を連載しましたが、これが『大分県の歴史と文化』として昭和三十六年一月に刊行の運びとなり、県地方史の存在を広くアピールしました。

また県地方史の発会十周年を記念し、さらに躍進を期して近世の『史料叢書』が計画されました。その第一弾として昭和三十八年三月に渡辺澄夫編『大分県地方史料叢書(一)』豊後国村明細帳(一)に玖珠・海部郡の村明細帳一二冊がガリ版刷(一九四ページ)で刊行されました。

翌三十九年には『大分県地方史料叢書(二) 豊後国郷帳(上)』が、渡辺澄夫・富来隆編としてガリ版刷(二七一ページ)で刊行されました。これは旧稲葉家蔵(臼杵市立図書館蔵)に関わる正保四年(一六四七)の『郷帳』上下の上巻です。下巻も同時に刊行予定でしたが、印刷所の火災のため、この時は未刊に終わりました。このため昭和四九年に『大分県史料叢書(二) 豊後国郷帳(下)』(タイプ印刷、一四八ページ)として上巻の目次も添えて、渡辺澄夫・佐藤満洋編で十年目に刊行し上下二巻を揃えることが出来ました。

『豊後国村明細帳(二)』(ガリ版刷、一七六ページ)は速見・玖珠・海部三郡内の一一冊を収録し、渡辺澄夫・安倍巖編として、昭和三十九年に刊行しました。『同村明細帳(三)』(ガリ版刷、二二二ページ)は昭和四三年に直入郡内の一五冊を収録し、渡辺澄夫・佐藤満洋編として刊行しました。翌四四年に『同村明細帳(四)』(ガリ版刷、一九〇ページ)には速見郡内の一二冊を収録し、渡辺澄夫・安倍巖・佐藤満洋編で刊行、『同村明細帳(五)』(ガリ版刷、二五三ページ)は翌四五年に日田郡内二〇冊を収録し、野口喜久雄・佐藤満洋編で刊行、『同明細帳(六)』(タイプ印刷、一九六ページ)は昭和四七年に日田郡内の一二冊を収録し、高倉芳男・佐藤満洋編で刊行しました。この巻からタイプ印刷となりましたが、これは会員の堀樫さんにタイプ印刷の原作りのお願いをしました。上記の『郷帳』(下)も堀さんの労によるものです。

『豊後国村明細帳(七)』(タイプ印刷、一九一ページ)には大分・海部・直入三郡九冊を収録し、野口喜久雄・佐藤満洋編で昭和四八年に刊行、『同村明細帳(八)』(タイプ印刷、二〇七ページ)には大分・海部・大野・速見四郡内の七冊を収録

し、豊田寛三・佐藤満洋・岩田善市編として昭和五〇年に刊行しました。

会財政の都合で叢書刊行が滞っていましたが昭和五四年に『大分県地方史料叢書(三) 豊前国村明細帳(一)』(タイプ印刷、一八七ページ)として、豊前国下毛・宇佐両郡内八冊を収録し、豊田寛三・佐藤満洋・中山重記編で刊行しました。なお堀枢さんの労を思わせたタイプ印刷はこの巻をもって終わりとなりました。

昭和五七年に『豊後国村明細帳(九)』(一九九ページ)は活版印刷に体裁を改めて、大分・海部・速見三郡内の六冊を収録、豊田寛三・秦政博・橋本讓司編で刊行しました。

昭和五九年には『大分県地方史料叢書(八一) 文化一揆史料集(一) 党民流説』(一三三ページ)が豊田寛三・秦政博・橋本讓司編で刊行、翌六〇年に『同叢書(八一) 文化一揆史料集(二) 岡藩編』(一九八ページ)を豊田寛三・秦政博・尾登一信編で刊行、昭和六二年に『同叢書(八一) 文化一揆史料集(三) 延岡藩編』(二〇六ページ)を豊田寛三・秦政博・尾登一信編として、一揆史料集三巻を刊行しました。

大分県近世庶民史料調査

渡辺澄夫先生は、昭和四一年度文部省科学研究費交付金(各個研究)申請に当たって、共同研究者として野口喜久雄・北村清士・安倍巖諸先生と佐藤満洋の名前を記入しました。そして、交付決定通知を受けると、早速共同研究者と分担を決めて、近世文書を多量に所蔵する旧庄屋家文書の調査に着手しました。調査の成果は、『大分県地方史』四三・四四合併号に「大分県近世庶民史料目録(一)」(以下「庶民史料目録」と略記)として、直入郡内の二庄屋家文書を渡辺澄夫・北村清士・佐藤満洋編で報告しました。会誌四五号に「庶民史料目録(二)」として、玖珠郡内と日田郡内の庄屋家文書を野口喜久雄編で報告、会誌四七号で「庶民史料目録(三)」として別府市・速見郡内の庄屋家文書を安倍巖編として報告、会誌四八号の「庶民史料目録(四)」で竹田市・大野郡内の庄屋家文書を北村清士編として報告しました。会誌四九号の「庶民史料目録(五)」で直入郡内の庄屋家文書を渡辺澄夫・野口喜久雄・佐藤満洋編として報告、会誌五六号の「庶民史料目録(六)」で大分市内の

庄屋家文書を野口喜久雄編として報告しました。

なお続編を予定していましたが、この目録をもとに古文書商が暗躍するという予想だにできなかった報告が寄せられたことから、目録による報告は(六)で中断しました。私個人の、この庶民史料調査の成果として、「豊後国直入郡地方の『かいち』の考察」(会誌四八号)、「辺地における近世農村の成立」(同四九・五一号)、「文禄検地における白杵町屋敷と石盛」(同五一号)、「太閤検地における村位別石盛制の研究」(同五八・六三号)、「村明細帳と村鏡帳の研究」(同一二〇・一二二号)等が思ひ出されます。

大分県地方史研究会に望むこと

近年の県地方史の青年層の役員・会員さんを見ていると、前述のように役員で若手は私一人だったところに次々と青年層の役員が人数を増していった当時を彷彿とさせるものがあり、大いに声援を贈りたいと思います。

ところで、近年の研究大会は出席者が少ないように思います。郡部の会員さんの出席を促す工夫が望まれます。その一つとして県内各地の研究会との連携を深め、地方委員を郡市部に委嘱してはいかがでしょうか。以前も地方委員が委嘱されていましたが、この地方委員に会費の集金や会誌の配布をお願いしたところに欠点がありました。この欠点を無くして、地域会員さんと県地方史役員とのパイプ役をお願いするというのはいかがでしょうか。中央委員だけでは会の発展は望めないかも知れません。

今年の研究大会でアーカイブズが論じられるそうですが、地方会員や県内各地の研究会と県地方史とのネットワーク作りのパイプ役を地方委員にお願いすることができるとは思いません。そうすれば公文書の廃棄・保存等に関わる情報も、このパイプ役の地方委員を通じて交換できると考えます。検討してみてください。

終わりに、五〇周年を迎えた大分県地方史研究会の益々の発展を祈念いたします。